写真2：鳥観図。20世紀末ごろの絵だと思われる。その後の建物は2012年に看護短大が移転し（ソンシン女子大に昇格）、救急センターや葬儀場ビルが付け加わったくらいである。

写真3：国立医療院の正面玄関

写真4：救急医療センター、奥が病院本館

写真5：救急車はヒュンダイ（現代）の車が多い。救急車の車体とライトの色は各国で違うが、韓国は白の車体に緑十字、緑色のライトである。実は救急車のサイレンの音や音の長さ、高さも、例えば「ピーポー、ピーポー」とか「パーフー、パーフー」というように各国ごとに違っている。外国の映画を見ていると気が付く。因みにオランダの救急車のサイレンは「♫ドーミーソーミー、♫ドーミーソーミー」と、旋律と音階がある。

■国立医療院の歴史

国立医療院はその歴史が興味深い。朝鮮半島では朝鮮戦争が1950年に勃発し、1953年に休戦している。以下の見聞記においてキーワードとなるこの2つの年号を最初に覚えておいて頂きたい。

この病院は1958年11月に開設した。開設とその後の運営はスカンジナビア3か国（デンマーク、ノルウェイ、スウェーデン）の医療支援で行われた。当時アジアで最も大きな病院であったという。医療支援が始まった時期が、朝鮮戦争中ではなく、戦争が終わった後という点に注目したい。植民地時代、宗主国が現地に病院や医学校を開設し運営を行った例は多い。日本も満州や朝鮮、台湾などに多くの病院や医学校を建てた。それは現地の風土病・熱帯病などに悩まされた日本人のためであり、また同じく原住民のためでもあった。現在でも先進国は経済関係の緊密化を図りたい国や政治的・軍事的視点から重要と考える発展途上国に医療支援を行っている。

しかしスカンジナビア3国は朝鮮戦争の休戦後も韓国への医療支援を継続している。貿易経済関係緊密化目的とか政治・軍事的要請であったとは考えられず、純粋に人道的な行為であったと考えられる。もし共産主義国ソ連の勢力拡大への牽制目的があったとしてもユーラシア（=Euro+Asia）大陸の西端と東端ではあまりに遠い。

またスカンジナビアとはいうものの、3つの別々の国が連合して一緒に支援にあたっている点も注目である。日本でも国同士ではないが、横浜の外国人居留民委員会が1863（文久3）年に開設・運営したTHE YOKOHAMA PUBLIC HOSPITAL（現・国際親善総合病院）という例もあるが、複数国とか、複数国の人々による病院共同運営は稀である。

「なぜスカンジナビアの別々の国である3国が連合して、韓国に医療支援を行ったのか」は医療の国際支援の在り方を考えるときに、大変参考となる事例といえそうだ。

■朝鮮戦争とスカンジナビア3か国の医療支援

1945年の日本の敗戦後、朝鮮半島は連合国軍の管轄になり、北緯38度線以北はソ連軍が、以南はアメリカ軍が占領した。連合国は朝鮮の独立運動派が樹立した「朝鮮人民共和国」の承認を否定し、朝鮮全土を連合国軍の軍政下に置いた。その後、連合国や国連での紆余曲折を経て1948年に米軍統治下の朝鮮のみで独立することが決まる。同年8月に大韓民国（以下では韓国と表記）が独立して建国した。翌月、残った朝鮮半島北側が朝鮮民主主義人民共和国として独立した。第二次大戦後、ドイツ、朝鮮、ベトナムは国と国民が2分され、別々の政治・軍事・経済体制に分かれてしまった。戦争が齎した悲劇だ。朝鮮とベトナムでは同じ民族が南北に分かれて戦うという更なる悲劇が起こった。朝鮮では南北統一への道も模索されていたが、1950年6月、北朝鮮軍の突如の南下侵攻により朝鮮戦争が始まる。ソウルは北朝鮮軍に占領され、韓国政府はプサン（釜山）に退却する。後ろは海だけという排水の陣で臨むことになった。在日米軍や国際連合軍が南朝鮮に送り込まれた。なお1950年の日本はGHQ　の占領下にある非独立国で、国家主権はなく（1951年サンフランシスコ講和条約）、国連加盟国になれておらず（1956年加盟）、韓国との国交も無かった（1965年国交正常化）。

スカンジナビアの3か国（スウェーデン、デンマーク、ノルウェイ）も朝鮮戦争が発生した韓国に医療ミッションを派遣する。スウェーデンが最初に動いた。スウェーデン政府は1950年9月に医師10人、看護師30人、その他スタッフ120人からなる赤十字救援部隊をプサン（釜山）に送り込み、U.S. Eighth Army（注:在日米軍もマッカーサーが率いる米軍第8軍であった）の管理下で200床の赤十字病院を開設し医療提供を開始した。ベッドはその後400床に増加する。1953年7月の朝鮮戦争休戦後も医療活動を継続し、1957年に帰国するまでに合計650人の救援隊が働き、2百万人近い患者の治療を行った。

デンマークは1951年1月に医師と看護師、医療従事者100人を乗せた病院船Jutladia丸をプサン（釜山）港に配船し、船上での医療提供を開始する。1952年の秋にインチョン（仁川）に移動。休戦後の1953年の年末にデンマークに帰港するまでの3年弱の期間に、合計630人の医療人が病院船での治療に関わり、1万5千人を超える患者の治療を行っている。

写真6 ：デンマークの病院船。釜山港に配船された。

ノルウェイは医療関係者と管理スタッフ83人で構成した移動外科チームを1951年6月に派遣した。ソウル北方のトンドゥチョン（東豆川）に移動外科医療センター（NORMASH: Norwegian Mobile Army Surgical Hospital）を設置する。任務は米軍第1軍の士官と兵士への医療提供であったが、戦争で負傷した民間人の治療も行い、休戦後はミッションの焦点を民間人の治療に変更した。治療や手術の合計は、入院患者14,755人、外来患者55,970人となった。医療提供に参加した人数は、軍医91人、軍病院付司祭7人、看護師133人、軍士官98人、補助スタッフ294人であった。

■朝鮮戦争休戦後のスカンジナビア連合による医療支援

朝鮮戦争は1953年に休戦協定が結ばれる。犠牲者は南北合わせて4百万人。5人に1人が戦死という凄まじい大戦争であった。国連軍は任務終了で撤退することになる。戦争で国土が荒廃した韓国は必要な医療人材も医療設備も不足しており、韓国政府はスカンジナビア医療チームに残ってほしいと懇願した。当時の韓国は世界の最貧国の一つであった。

何回かの交渉が行われた後の1958年11月に国連韓国復興機関とスカンジナビア3か国は韓国に対して医療支援を行うことを決定した。国連韓国復興機関（UNKRA：United Nations Korean Reconstruction Agency）とは第二次大戦で枢軸国による侵略を受けた諸国に対する救済援助を目的とする組織で、韓国には1950―58年の間、経済復興プログラムを実施している。財源は34か国の国連加盟国と5か国の非加盟国からの148.5百万ドルの寄付であった。

戦火で荒廃したソウルに1958年11月、UNKRAとスカンジナビア3国の医療支援によって「医療センター」が開設された。ベッド数は465床で公共医療の発祥となった。翌年、看護学校が開校され、スカンジナビアの教師による看護師育成が始まった。写真7は1959年5月21日付けの新聞記事である。

写真7：開設された看護学校で、スカンジナビア人の教師から近代看護を学ぶ

韓国への医療援助はスカンジナビアの政府だけでなく、民間人や団体からもなされている。例えば写真8は写真7から1週間後の1959年5月28日の新聞記事だ。医療センターにデンマークの国民からメガネ51,000枚が贈られたことを報じる記事である、価格換算では10万ドル以上。メガネが必要とするが購入する余裕がない51,000人にプレゼントされる。医療センターの眼科部長の支援依頼にデンマーク赤十字社とデンマーク新聞社が協賛し、デンマークの国民に呼びかけて集められた寄付で購入されたメガネである。デンマークの大学や病院、眼鏡メーカーなどが協力した。赤十字社が募金と船舶輸送作業を担当し、船舶会社は無料で搬送している。記事は「この援助が両国の人々を緊密にし、メガネを贈ってもらってよく見え読めるようになった韓国の人たちは長い間感謝の気持ちを持ち続けるだろう」と医療センターの理事であるの韓国人医師の感謝の言葉で締め括られている。

写真8：デンマークの国民から贈られたメガネを点検する医療センター眼科部長やメガネ関係者、病院スタッフ。

「医療センター」は1958年の開設後の10年間はスカンジナビア医療ミッションと韓国政府との共同で運営された。1965年には研修医の研修が病院で開始され、初年度は25人が研修を終えている。そしてクリスマス

写真9：韓国の医療センターに来たスカンジナビアの医師

明けの1967年12月27日、スカンジナビア代表と韓国政府の間で、医療センターの経営権を韓国政府に移譲する合意覚書への調印が行われた。1968年に韓国政府に財産と運営が譲渡された。

■スカンジナビア連合撤退後の国立医療院

スカンジナビア連合が撤退した後、病院は国立病院になった。以下では「国立医療院」と表記する。1979年に看護学校はカレッジ（短大）に昇格。1983年にキャンパス内に7階建て入院病棟と4階建て外来病棟が建てられる。1991年には診療部が開設。2009年に特別法によって独立法人の形式で運営されることになり、2010年に独立法人the National Medical Centerとなった。現在はソウルの中心地にあるが、2020年に郊外のカンナム（江南）に移転する計画もあるそうだ。

病院敷地内にスカンジナビアからの医療スタッフが暮らした宿舎が整備されて残されている。その一部が“National Medical Center Scandinavian Memorial Hall”という資料展示室になっていた。今回の「世界の病院から」の内容は、ここの展示資料の中で英語表記がなされている資料を取材して得た知識である。百聞は一見に如かず。病院敷地内でスカンジナビアの医療が行われたと思われる場所を写真10～17で紹介したい。

写真10：おそらくはこの煉瓦建ての建物が、昔はスカンジナビア3か国による医療センターの建物であったのだと推測される。写真11、12も同じ建物。

写真11：病院敷地内に建つこの建物は、現在では韓国で初めてのホスピス・緩和ケア病棟も内包する。現在韓国のホスピス・緩和ケア病棟はこの国立医療院とソウル赤十字病院2か所だけである。ソウル赤十字病院のホスピスは、2017年2月にオープンしたばかりであった。

写真12：災害＆輸送センター。建物の内部はMRI、ホスピス・緩和ケアセンター、トラウマ病棟であるようだ。

写真13：「この医療センター（病院）が設立されたという国際友好の記念碑としてモクレンの木を植樹する。1967年3月20日」。しかし、周辺にはモクレンの木々（magnolias）は見当たらなかった。後方にスカンジナビアスタッフの宿舎が見える。

写真14：病院敷地内の一角に、赤煉瓦建てのヨーロッパ風建物（長屋）がある。そこだけは雰囲気が違う。スカンジナビアから来た病院スタッフが暮した住居である。寒い国の浅葱鼠色の曇天の日に、赤煉瓦の建物を見かけるとほっとした暖かさを感じる。世界のどこでも煉瓦の建物は、病院にフィットする。芝生の広場の対面に写真10～12の煉瓦建て建物がある。

写真15：かつてスカンジナビアからの医療スタッフが暮らした宿舎（長屋）。地価が高いソウルの中心地であるのに、このような医療史跡を整備して残している文化水準が凄い。

写真16：National Medical Center Scandinavian Memorial Hall。2015年4月2日に開設。1階は国立医療院記念室、2階は国立医療院歴史室とスカンジナビア室になっている。